

# W. Hazlittの文章道

## —感性表現の道—

中 川 誠\*

### はじめに

稀代の名文家 R. L. Stevenson (1850–94) は、「ハズリットのような文章を書ける者は、後にも先にもいない」と言ってハズリットを激賞した。一方ではハズリットのすぐれた伝記と決定版全集を出した P. P. Howe は、「彼はハズリットを生きた」とまで人に言われたほど、ハズリットを愛し、その文章に心酔した。ハズリットを読みながらハズリットになりきった思いで一生を送ったのであろう。だからこそ、今もそれを越えることはできないハズリット伝記を書き、イギリス作家の中でも最大の多作家とされる膨大な分量のハズリット全集を出すことができたのである。(i.e. *The Life of William Hazlitt*, Hamish Hamilton, 1922 ; *The Complete Works of William Hazlitt*, Dent & Sons, 21vols., 1930–34) Howe の仕事を見るにつけ、文学研究に最も大切な基本姿勢とは何かを考えさせられる。

旧約は、「はじめに言葉ありき」と言った。そして「われわれは言葉によってはじめて人間であることができる」とも言った。人間の証を立てる最大の武器である言葉とは一体何なのか？ そして何であるべきか？ その言葉を文字で書かれた文章という形で捉えるならば、文章の究極の目的は、正確に自分自身のものであること、これがハズリットの文章道の要であった。ハズリットはなぜ文章に惹かれ、文章に執着したのか？ それを問うことは、ハズリットの最も肝心なところを見ることになるだろう。

### I. 気高い思想と誠実さ

その文章と演説で18世紀イギリス随一と謳われたパーク (Edmund Burke, 1729–97) のことをハズリットは次のように述べている。

「パークの演説のどれか一つを取り出したところで、彼の精神力がいかなるものであるかを満足に伝えることはできない。彼を公平に評価するためには、彼の仕事全部を引用せねばなるまい。彼の

---

\*Makoto NAKAGAWA 国際言語文化学科・英米言語文化専攻 (English and American Course, Department of International Studies in Language and Culture)

書いたものの全部がパークその人なのだ。彼の思想を構成しているものは人の千差万別の意見などで固められた事実ではない。彼の理解力は人間の心と同じくらい深く底知れない。しかも自然界と同様、千変万化するのだ。したがって彼が論ずる話題の一つ一つが彼の全精神を働かせながら、今まで誰も見たことがないような様相を呈することになる。彼の精神力を証明するものを彼の演説や文章のどれか一つに探し出そうとしても無駄であろう。それらはすべて、何か新しく付け加えられた力の証を含んでいるのだから。大体、変幻自在のプロティウスを縛ったり、天才の自由な飛翔を制限したりすることなど誰にできようか？」<sup>(1)</sup>

ハズリットによれば、パークの知性は、汲めども尽きぬ人の心と、限りなく多様な自然界万物そのままに、それが取り上げた事柄の一つ一つの中に彼の新しい面を語っているからである。

ハズリットがエッセイストの範と仰いだモンテーニュは、「著者の面影と、その人の思想の大体」(II-10)を知ることを自分の読書目的としたが、それと同じことを、彼の『エッセー』を読む人たちに要求している。読者が気まぐれに取り上げた部分を読んで、そこから著者の思想を知ろうなどと考へては困るということを繰り返し述べている。

「われわれは皆もろもろの断片からなっており、その構成ははなはだ雑然として食いちがっているから、各断片は各瞬間ごとに思い思いのことをする。だから、ある時のわれわれと、また別のある時のわれわれとの間には、われわれと他人との間におけるほどの相違がある。」(II-10)

「私の物語は、いろいろに移り変わる出来事と、定めのない、否、ときには相反する思想との記録である。」(III-2)

「世界の万物は、要するに多様と相違にすぎない。」(II-20)

モンテーニュが自己(moi)を主題として書き綴った『エッセー』という膨大な書物が、限りなく多様な自然界万物と人間性をそのまま反映しているのは不思議ではない。そこには論理的統一などはじめから意図されていない。

『エッセー』の中に素朴な力強い文体と、深い誠実味を見いだして、それを自分の友としたハズリットの文章もまた、さまざまな主題のもとに彼自身を語った。ハズリットがパークを愛したのは、モンテーニュの『エッセー』と同じように、その文章から著者パークの気高い性格と、それを伝える情熱がほとぼしり出ていたからである。人間の特性の中でも、高潔な人格と誠実さ、この二つをハズリットは何よりも高く買った。

モンテーニュやパークがそうであったように、あるいはまたそれに劣らずハズリットが愛読した18世紀イギリスの散文家たち、特にジョンソン博士(Dr. Samuel Johnson, 1709-84)をはじめ、彼を取

り巻くエッセイストたちがそうであったように、同じ古典に育かれた者たちに共通する辛辣な人間観は、人間性に思いを寄せる文人たちの宿命といえるものであるが、ハズリットの場合もまた、理想主義的な人間観と常に同居している。絵で言うなら、自分の好きな画家にホガース (William Hogarth, 1697-1764) を選ぶか、あるいはそれと正反対のラファエロ (Raphaello Sanzio, 1483-1520) の画風のどちらを選ぶかによって、人の人間観の明暗が分かれる。この二人の画家の何が違うのか？ ハズリットは次のように述べている。

「人はホガースであるよりもラファエロでありたいと願うだろう。この二人の画家のそれぞれ異なる作品が要求する才能や、それが生み出す喜びについての議論はともかく、われわれは人間性を低める絵よりもそれを高める絵を愛する。われわれはかくありたいと願うことをなしたい。しかも、そうあることが最も難しいものこそ、それをなすこともまた最も難しいのである。」<sup>(2)</sup>

「慈しみは気高い精神を必要とするが、自己愛にはそれは無用である。慈しみを描き出すには自己愛を描く以上の知性がなくてはならない。表現、及びそれに伴うすべてについては、知的であることは高い道徳性の反映である。ラファエロの人物画を支えるのは思想であるが、ホガースのそれは即物的人間観・風俗観によってゆがめられている。人の魂の鼓動を力強く表現する原動力は、美しく気高い思想である。美しく広げられた魂が鏡の中に見えるように顔に表れている。目的が大きくなると、それに似つかわしい形を伴う。いわば精神が身体全体に作用し、等しくそれを活性化する。それとは反対に、描く者の興味が、狭いつまらぬものに向けられるならば、その絵は人間の特定の部分を捉えるにすぎず、そこに卑俗な表現を与えることによって人間模様を矮小化してしまうのである。人間の心が、このように気高く美しく表現できるものならば、それを描き切ったラファエロの偉大さは自ずと明らかであろう。あらゆる部分を他の部分に関連させながら、そこに有機的統一を保たせることは、部分々々を切り離してそのいずれかを強調することよりも、はるかに難しい。言いかえれば、一つの大きな全体を力強く、しかも精密に描き出す方が、何か一つの部分や表情を戯画化するよりも難しいことなのである。ラファエロの絵筆を、樹木に吹きつける烈風の思うままに翻弄される一本の枝にたとえるならば、ホガースの筆は、色とりどりの激情の突風・施風の中で、せわしげに細い身を折り、身を曲げる一本のワラにたとえることができる。偉大さを作るものは善だけだと言うつもりはない。心の力、精神の力が偉大さを作る、と私は言いたいのだ。ホガースの《丁稚小僧》には生気がない。ラファエロの《魔術師エリアス》には悪徳の偉大さ、崇高さがある。魔法使いのような利己的、凶悪な魂を表現するときでさえ、それを描く者の無限の想像力と強烈な目的意識が、その悪徳に壮大な風格を与えるだけでなく、悪と我欲に呻吟する人間本性に、ひときわ強く訴えるのである。」<sup>(3)</sup>

上の「偉大さを作るものは善だけだと言うつもりはない」から結論にいたる部分は、絵画のみなら

ず文学作品や文章そのものについても、ハズリットがどのような表現と創作態度を好んだかを言い得て妙である。彼の名文の一典型として原文も添えておこう。以下、この稿で原文が添えられている時は、これと同じ理由による。

I do not mean to say that goodness alone constitutes greatness, but mental power does. Hogarth's *Good Apprentice* is insipid : Raphael has clothed *Elymas the Sorcerer* with all the dignity and grandeur of vice. Selfish characters and passions borrow greatness from the range of imagination, and strength of purpose ; and besides, have an advantage in natural force and interest.

シェイクスピア劇に登場するマクベスのような利己的で凶悪な魂でも、われわれは憎む気はしない。シェイクスピアの手にかかるとどんな悪徳も、それが卑俗な人物ではなく壮大な人物の形を取って現れる時、われわれはただ、苛酷な運命に胸打たれるのである。ハズリットがなぜシェイクスピアを愛したのかもわかるだろう。

ハズリットの友人で彼と並ぶエッセイスト・ラム (Charles Lamb, 1775-1834) は、「われ、愚人を愛す」(I love a fool.) という言葉を好んで人間の弱さ、愚かしさ、哀れさに同情して書いた。この醜悪な面に注目して人間を風刺したホガースがラムのお気に入りの画家であった。ラムが“I love a fool.”と言うならハズリットは即座に“I hate a fool.”と答えただろう。ハズリットの仕事は、古典に充満する気高い人間性に合わない同時代人の不合理と軽薄さを弾劾することであった。パークもまた同様に、彼の演説と文章は自分に合わない相手をいかに効果的に攻撃、説得するかという努力の結晶であった。それも推敲に推敲を加えたものであった。推敲ということは、言葉となった自分の思想を確認しながら、それをより効果的に言い表すため、言葉に更に追い打ちをかけることである。浅い思想に推敲は無用である。文章を磨くことによって、書く者の人間観が研ぎすまされてゆく。ハズリットとパークが共に、推敲に多くの時間をかけたことは意味深い。推敲によって彼ら独自の人間観が一段と説得力を持つのである。

人間の醜悪さ脆さを許し憐れむか、あるいは許し難いものとして弾劾するか、このいずれを是とし非とするかは軽々しく論ずるわけにはいかぬが、これをハズリットがラファエロとホガースの画風に對比させたのは興味深い。そこには妥協を許さぬハズリットの理想主義的人間観がよく出ている。イギリス的ユーモアの定義の一つに、“Humour is feeling in earnest, and thinking in fun.” (ユーモアとは、まじめに感じ、ふざけて考えること。) というのがある。ハズリットは feeling は勿論、thinking も doing もみな、in earnest ではなかつただろうか。きまじめすぎて人を憎むことの多い者に避けられない苛酷な運命を彼は作ってゆくことになる。殉難者として生きるか、あるいは傍観者として生きるかの問題に触れてくるだろう。ハズリットには性格からしても前者の道しかなかった。ラムには狂気の母親と姉がいて、自らもその発作の恐怖があった。ハズリットのように人間を憎んで腹を立てるなど断じて避けねばならぬ危険なことであつただろう。許そうと努めるほかなかつたのである。

ハズリットが心酔した古典の精神とは、どのようなものであったのか？ 彼は次のように書いている。「記念碑を無用とする者にこそ記念碑は似つかわしい。つまり、人々の心と記憶の中に、自らを一つの記念碑として打ち立てた者のことである。」<sup>(4)</sup>

上の「記念碑を無用とする者」とは、古典の中に生きる偉人たちのことであって、ハズリットが繰り返し言う「気高い思想」、「偉大なるもの」とは、彼ら古典の人々の精神であり、その効用を彼は次のように述べる。

「名声を受け継ぐのは死者ではなく生者である。古代の偉人を気高い誇りをもって顧みるのはわれわれである。われわれは川の水を飲むように、溢れる栄光を飲み、その栄光の中でわれわれが未来へ向けて羽ばたく翼を活気づけるのである。」<sup>(5)</sup>

ハズリットは古人と古典を愛することの必要性を何度も力説する。「力強い死者と語ることによって、われわれは知識と共に感性を吸収する」<sup>(6)</sup>とか、「ローマとアテネが人類史に果たした役割は何ものによっても代えることができない。すべての目がその二つの都市を仰ぎ見てきた。彼らが放つ光は強烈な灯台の明かりのように、時の暗やみを照らしている。」<sup>(7)</sup>という言葉など、その最たるものであろう。モンテーニュの次の言葉なども、これらと同じ精神で書かれた。

「ギリシア・ローマの人たち、偉大な人格と該博な学識とが一般に相伴なった時代」(Ⅱ-10)

「古典、いかにして己れ自らを知るべきかを論ずる、よく死に、よく生きる道を教える学問を求めて…」(同)

なぜ古代・古人を尊ぶのか？ モンテーニュによれば、こうである。

「私は幼年時代から古代の人々と共に育てられた。…彼らはあの世の人である。私の父もまたそうであり、彼らと同じくらい完全にあの世の人となっている。でも私は完全な、きわめて強い結びつきによって、今もなお、この父に対して追憶と親愛の情を抱き続けている。それどころか、私は持ち前の性分から、故人の方を一層大切にす。彼らはもう自分では何もできないのだから、それだけになおさら私の助力を必要としていると私は思う。…ここに感謝があり、ここにこそ感謝は光り輝く。かつて私の友愛と感謝に値した人たちは、この世を去っても決してそれらを失いはしなかった。私はそれらを、この世になく、何も知らない彼らに、よりよく、一層心を込めて支払った。私は自分の友だちについても、彼らがもはやこれを知るすべを持たない時、より一層の愛を込めて語るのである。」(Ⅲ-9)

死者と古代の人たちの方に一層親しい感情を抱いているというのは、ハズリットに言わせるなら、

新しい文学と同じように現代には、埃と煙と雑音が取り巻いて、古代の、あの純粹で静寂な永劫不変の雰囲気はないからである。<sup>(8)</sup>

ミルトン (John Milton, 1608-74) も次のように歌った。

「私たちが別れて低い世界へ入り、  
こんなに野卑な地をどうしてさまよい歩けようか？  
永遠の果実を知るわれらに、  
この濁った空気をどうして吸えようか？」<sup>(9)</sup>

## II. 言葉と私 (moi)

自由主義を標榜してフランス革命を賛美したハズリットと、それに対して警鐘を打ち鳴らしたパークとでは政治思想の面では合わなかったとしても、文人として人間としてパークはハズリットにとって、その著作を読むたびに、常に新しいものを発見するという人物であった。パークが語る主題が多岐にわたればわたるほど、そこには千変万化する著者の面影と思想があった。ハズリットの少年時代に在世していたパークをハズリットが古典の人と同格に見ることはありえないとしても、パークの文章を読めば読むほど常に新しいものを発見するということは、ハズリットの中でパークはモンテーニュと同じように、ほとんど古典的な存在になっていたということである。現にパークは、ハズリットの文章道を作る上で、モンテーニュに劣らず大きな役割を果たしたのである。多くの論敵・政敵を持ったパークが、世を去って後もその文章の一つ二つを垣間見る者たちによって誤って評価されるようなことがあれば、それはハズリットには座視できないことであろう。敵の多いことではパークに劣らなかったハズリット自身、次のように書いている。

「私のような人間が今もこれから先にも必ずどこかにいると私は信じたい。私が集めるのに心血を注いできた、稀にしか見ることができない真理の閃光が私の死と共に消えてしまうのでなく、そのような人たちの心の中にいつまでも生き続けてくれるとしたら、それは私の本望である。」<sup>(10)</sup>

「自分が集めるのに心血を注いできた、稀にしか見ることができない真理の閃光」とハズリットは言った。これが文章に賭ける者の心根というものであろう。なぜなら、自分の真実を表現することに全精魂を傾けている中で、その努力の結晶たる文章が生まれ出る時、その文章こそ真理の閃光というべきであって、それと遭遇する喜びは稀にしか得られないからである。文章道とは、その閃光の瞬間を求める作業にほかならない。

ではその瞬間はどうすれば得られるのか？ モンテーニュは「真理の閃光」とは言わずに、「肉も骨もある自分の結晶」と言った。彼にとって文章道は、誠実であることに帰着するのである。

「もしも田舎に、または都会に、フランスまたは外国に、その人に私の性格が気に入り、その人の気持もまた私に嬉しいような、そういう誰かが、あるいはそういう何かよい仲間がいるならば、ただ掌を打ち鳴らしてくれればよい。私は肉も骨もある『エッセー』を彼らに進上に赴くであろう。」  
(Ⅲ-5)

「確かにこの人こそ私の心を知ってくれる人だと知るならば、いくら遠くても私はその人を尋ねてゆくであろう。」(Ⅲ-9)

「全く私は私自身をここに描いているのです。私自らがこの本の内容なのです。」(読者に)

「私はここに、ただ私自身を明らかにしようと目指しているだけだ。」(I-26)

「私が、この本を作ったのではない。むしろこの本が私を作ったので、それは著者と本質を同じくする書物であって、もっぱら私に関するもの、私の生活と切り離せないものなのである。」(II-18)

聖餐式のパンと葡萄酒がキリストの血肉と同質であるとされているように、『エッセー』は著者モンテーニュと同質 (consubstantial) のものなのである。自分の心血を注いだ著作を大切に思う気持を述べた上の引用文は、文章によって自分と心と同じうする友を求めた二人の文人の夢と情熱を語って、いずれがまさるとも劣らぬ名文である。

バークを知るためにはその著作を全部読まなければならぬとハズリットは言っていたが、これもバークをよく知る人ならではの言葉である。それだけではなく、ハズリットのその言葉は、ハズリット自身の著作について彼が抱いていた心情を代弁したと言ってよいだろう。自分の書いたもの全体を読んでほしいと言っていたモンテーニュにも通ずる。これを受けてフロベール (Gustave Flaubert, 1821-80) は、『エッセー』は始めから終わりまで何度も繰り返し読むべき書物であって、人は読むたびに新しいものを発見するだろう、と言っていた。モンテーニュ自身は、自分のエッセーの一つ二つを読んで自分のことを誤って解釈するようなことをしたら、自分はそれを訂正するためにいつでもあの世から舞い戻ってくるとも言っていた。『エッセー』は自伝でもあるのだから、断片的に読まれては迷惑だというだけではなく、むしろそれ以上に、自分の文章は言葉の本来の役割、すなわち真実を伝える、いや、可能な限り真実に迫る役割を最高度に発揮させた散文なのだという自負があったのであろう。バークもハズリットもこの点、同様であった。

それだけの努力と研鑽あってはじめて成し遂げられた彼らの散文なのである。バークが自分の演説と論文を丹念に推敲したことは前に述べたが、それほどまでに自分の意見を大切にしたからこそ、18世紀イギリス国会の雄弁家たちの中で抜群に、彼の文章の詳細が今に伝わって、それ以後のイギリス政治を導くことになったのである。

言葉は、ただ自分を語る手段だから大切にしたいというだけではない。言葉は人間同士をつなぐ唯一の、そして真実を明らかにして同胞に伝える、ほとんど神々の声にも等しい、それ自身、犯しがたい目的であるということを彼らは知っていた。人類同士の掟を定めた時の旧約にもあったではないか。「はじめに言葉ありき」と。

これをモンテーニュは次のように解説している。

「われわれは言葉によってはじめて人間である。いや、それによってはじめてお互いに心が通うのだ。」(I-19)

「言葉こそわれわれの意志や思想が相互に通い合うための唯一の道具であり、われわれの靈魂の代弁者なのだ。これを失ってはわれわれはもう手をつなぐことも知り合うこともできない。これがわれわれを偽るならば、われわれのすべての交わりは絶たれ、人類社会のすべての連帯は解けてしまう。」(II-18)

お互いの communication のために、そして自分の identity (個性) を守り、人に示すための最大の手段である言葉が、本当に自分自身と人間同士の幸せのために役立っているのかどうか？ われわれを支える最大の希望と根拠である筈の言葉と人間性との関係は、果たして何なのか？ バークの場合を振り返ってみよう。

文人政治家としてのバークの運命は他の政治家たちとは違っていた。18世紀イギリス国会は有能政治家を輩出し、弁舌を重んずる議会政治が確立した時代のものであった。英語の力と豊かさが意識され、それを誇示する伝統が定まった時でもあった。その中でバークは雄弁家として今に伝わるが、政治家としては要職にもつげず、ライバルの雄弁政治家チャタム (William Pitt or the Elder Pitt, the 1st Earl of Chatham, 1708-78) やフォックス (Charles James Fox, 1749-1806) とは対照的な存在であった。首相を勤めたこの二人の高名な政治家とは違って、彼らにまさる雄弁家であったことが、むしろバークの立身出世を阻むことになった。政治の世界で一番大切なのは協力者・仲間を持つことであって、人に抜きん出た弁舌の才能ではなかった。同時代の代表的文人たちが集まって議論を戦わせたジョンソン・クラブ (Dr. Johnson's Club) のメンバーに迎えられ、バークは座談の名手ジョンソン博士をも脅かすほどの雄弁家として、当意即妙の芸は並ぶ者もいなかったと伝えられている。いかに弁論術がもてはやされ、英語が世界一の言語としてイギリス人たちを鼓舞した18世紀といえども、相手の反論を許さぬほどの雄弁がバークの運命を作った。バークが議会で孤立無援となって行ったのとは違って、チャタムやフォックスには支援者がいた。彼らの同時代人が去って、当時の事情も変わり、人々の利害関係もなくなってはじめて、推敲に推敲を重ねて生きのこったバークの文章が光を放ち、後世に大きな影響を及ぼすことになるのである。今はチャタムもフォックスも歴史上の人物ではあっても、その影響力は遠くバークに及ばない。多くの支持者と権力に恵まれた雄弁政治家たちも、文字



にのこされた集積を持たなかったために、それをのこしたパークほどの影響力を持たなかったことを考えると、まさしくハズリットが言ったとおり、「言葉こそ、永遠にのこる唯一のものである。」(Words are the only things that last for ever.)<sup>(40)</sup> この「言葉」を文章と言ってもよい。

### Ⅲ. 詩と散文

ハズリットがエッセイ集「円卓会議」(*The Round Table*, April 1817)、「シェイクスピア劇の登場人物たち」(*Characters of Shakespeare's Plays*, January 1818)、「イギリス詩人論」(*Lectures on the English Poets*, July 1818)を刊行してエッセイスト、文学批評家として登場した時、「クォーターリー・レビュー」(*The Quarterly Review*)の編集者W. ギフォード(William Gifford)が彼を酷評した。その趣旨はハズリットによれば次のようなものである。

「ウィリアム・ハズリットという名の三文文士がひとりよがりの妙な英語と文体で、いかにも器用な文章家気取りでいる。その言うことたるや陳腐にして浅薄、アタマはねじ曲がって人柄は品性低劣きまわりない。内容はひねくれたことばかりだ。そのくせ大衆におもねるかと思えば今度は逆に変人奇人をてらったりする。アディソン(筆者注: Joseph Addison, 1672-1719)にならってエッセイを書いたと自称しているが、このハズリット氏は無意味なことを珍奇な文体で飾り立てるばかりで、まるでお話にならない。とんだくわせ者もいるものだ。」<sup>(41)</sup>

このような悪口に対抗してハズリットは長文の手紙を公表する。(P. P. Howe注: *A Letter to William Gifford, Esq. from William Hazlitt, Esq.*, Printed by W. Smith, King Street, Seven Dials, for John Miller, Burlington Arcade, Piccardilly, 1819. Price three Shillings. In the following year it was taken over by the publisher of *A View of the English Stage*. Reprinted by Mr. W. C. Hazlitt in Bohn's Library in the volume containing *The Spirit of the Age*, 1886)

ギフォードのことをハズリットはその人物論『時代精神』(*The Spirit of the Age*)の一項目に挙げて、そこでも攻撃している。この手紙は、ハズリットに著しい特徴の一つ、相手を選ばぬ辛辣な論調の典型というにとどまらず、彼の人と文章の拠って立つ原理を解き明かす重要な資料ともなっている。その手紙の中で彼は自分のエッセイ(その時点ではギフォードが槍玉にあげた『円卓会議』のこと)を実質的に散文で書かれた風刺(prose-satires)であると自認するが、その後の彼のエッセイの多くに流れる風刺的な基調を既に自覚していたことがわかる。

友人知人の多くが彼から離れて行っただけではなく、若い頃の彼が熱烈に賛美したコウルリジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)やワーズワス(William Wordsworth, 1770-1850)のような先輩詩人までが、彼と仇敵同士のような間柄になってしまったのは、政治思想や気質の違いにもよるであろうが、それに劣らず、齒に衣着せぬ彼の口調と文章が大きな原因となったと考えられる。彼自ら

はあまり語ろうとしなかった実生活面をわれわれに少しでも伝える同時代人の記述を見ると、彼のそのような激しい面が折にふれ語られている。中でもコウルリジやワーズワスがハズリットの性格を語った毒舌はその典型と言えるが、この二人の詩人の変節的な性格もさることながら、ハズリットの理想主義的な気質と裏腹の極端な人間嫌いと非社交性が祟ったのであろう。

彼が得意とする攻撃的な論調を「ウィリアム・ギフォード氏への書簡 (*Letter to William Gifford, Esq.*)」から挙げてみる。毒舌家で鳴らしたボリンブローク (Henry Bolingbroke, 1678-1751) を愛読して攻撃調を身につけたパークの文章修行のことを考えると、そのパークの文体に惹かれたハズリット自身の文章家として辿る運命もまた容易ならぬものとなっていくこと必定である。モンテーニュは、「文体は体質である」と言っている。普通は「性格」「気質」と言うところを「体質」と言い切ったのは、いかにもモンテーニュらしい。性格・気質はある程度変わることもあるが体質ばかりは生まれつきのものである。「文体は体質」と書いたモンテーニュの意気込みは、文体に寄せる彼の関心が並々ならぬものであることを教えて、重要である。以下、ギフォードへの手紙：

「(要約) 真実と虚偽とを識別するなど貴殿には思いも寄らぬことだ。貴殿の関心事は相手が進歩主義者か保守主義者のどちらかということだけだ。(筆者注：ギフォードが編集する『クォーターリー・レビュー』は後者に味方した。) あこぎな金儲け根性と党派心しか持ち合わせない貴殿には、物事をまっすぐに評価する気持も能力も全くない。貴殿の『クォーターリー・レビュー』には上等な趣味や、まともな知識は露ほども見られない。そこに充満するのは、ただ、わがイギリス全土に徘徊する偏見、独断、悪意、憎悪、無知、等々、ありとあらゆる魑魅魍魎のカスとクズのありったけをかき集めてそれを固めたものばかりである。顧客が貴殿に期待するのは貴殿が地べたに這いつくばって世のチリ・アクタのたぐいを吸い取ることであり、そのようなことしか貴殿にはできはしない。貴殿が少しでもまともな人間なら、彼らもあるいは別様に考えたかもしれないが、彼ら自身のさもしい根性を託すには貴殿こそおあつらえ向きの人間であって、もしも貴殿が彼らに逆らうような素振りを見せようものなら、彼らには貴殿など即刻クビにする力がある。そうなったら最後、貴殿はただ泣きべそをかく以外に何もできない能なしだということを彼らは先刻ご承知だ。貴殿のような最下等の生まれから成り上がった人間には、自分と同じ苦労と屈辱を味わわずに人が有名になるなど断じて許せない。芽の出ない文士に対しては威張りくさり、優秀な文士を見れば憎悪する。人の書いたものに欠点を見つけては腹を立て、まともな作品に出会えば憤激する。その上、貴殿のようなアタマの悪い人間の手にかかっては、あらゆるものがねじ曲げられ、歪められずにはいない。わかりもしないことに口を出しては、とんでもない馬鹿げたことを言う。人物論などを書いたりすると貴殿にはおよそ普通レベルの人間の正直というものが欠けているし、一般の問題を論じれば、どんな市民でも持ち合わせている程度の理解力さえない。非常識と無能、これが貴殿という人間の本质であり、すべてである。」<sup>(12)</sup>

「ハズリットという三文文士がひとりよがりの新造語を考案して得意になっている、云々」という非難に対してはハズリットは次のように言う。

「私がそのようなことをした実例を一つでも挙げてみられよ。私は自分の考えを言い表すために新造語を使ったことなど一度もない。それは貴殿が書く文の中には言い古された陳腐ならざる内容は一つもないのと同様である。つまり、私の文体は貴殿の書く内容と同じように古いのだ。」<sup>(13)</sup>

ハズリットの文体は美辞麗句だけでできているというギフォードの悪口に対しては次のように答える。

「文体のことを言うなら、私は自分の文体を意識したことはほとんど無い。私の考えに合うと思える言葉を使っただけである。その言葉が見つかるまで私は骨惜しみせず頑張った。真実を求める道中で私は美を発見することがあった。」(As to my style, I thought little about it. I only used the word which seemed to me to signify the idea I wanted to convey, and I did not rest till I had got it. In seeking for truth I sometimes found beauty.)<sup>(14)</sup>

「真実を求める道中で私は美を発見することがあった」とは意味深い言葉である。キーツ (John Keats, 1795–1821) はこの手紙を読んで、「ハズリットの内からほとぼり出る迫力と力強い文体、それはまさしく天才のものだ」と言った。<sup>(15)</sup>

キーツは、「私が真実を確信するのは、そこに美が明確に認められる時だけだ」(I never can feel certain of any truth but from a clear perception of its beauty.)<sup>(16)</sup>と書いた。更にこの詩人は、「想像力が美を直感するなら、それは必ず真実なのであって、それが実在したかどうかは問題ではない」(What the imagination seizes as beauty must be truth – whether it existed before or not.)<sup>(17)</sup>と言う。抽象的概念としての自然界万物、全人類と自己を一体化させることによってキーツはそこに普遍的な美を求め、見いだすというのである。その美は生きた者同士の間人間関係の中には見いだされない。妻や子や普通の家族的つながりも含めて、およそ俗界に属する仕草のすべては、この詩人が目指す美の発見と創造には無縁であるとも言っている。唯美主義者キーツならではの言葉である。

ではハズリットの言う真、美とは何か？ 言葉・文章を彼はどのように考えていたのか？ そして彼の散文の目的は何なのか？ その手がかりとして彼の「詩人の散文について」(*On the Prose-style of Poets*, August 1822)の要旨を見よう。

「真理を探さなければならない時に詩人は美を探す。詩人は色とりどりの夢想、幻想をあらゆる物に着せる。だが散文を書く者は辛抱強く主題から少しずつ、自分の材料を引き出さなければならない。」(The prose-writer is compelled to extract his materials patiently and bit by bit, from his subject.)

詩人は感情にひたっていても構わないが、散文書きは実際的な目的に奉仕しなければならない。詩人は気が赴くままに野山や森に脇道して花を摘むこともできる。しかし散文作者は泥だらけの道を歩かねばならぬし、人が通ったことのない道を通って遠く長い旅をしなければならない。この違いが詩人の書く散文と散文作者のそれに出てくる。ねばり強く歩く散文作者は足もとの材料を縦横に使うが、詩人は現実から遊離して言語表現技術の奴隷となる。

「美的感覚と崇高さが詩作の原理なら、散文の原理は説得である。説得に役立たないような飾りや誇張は無用である。力と明晰さが肝心なのであって、使う一語一語はそれを強化するための決定打とならなければならない。散文では思想が鎖のように他のそれにつながっていかなければならない。文章には躍動感が必要である。重厚にして正確、かつ的確な用語の集まりが一团となって読者説得に向かうのが散文である。

「…詩には語の倒置、破格が許されるが、散文では許されない。そのためわれわれ散文書きが散文で自然な語順だと考えている普通の表現が、詩人には難しく思える。詩人が美しい文章を書いても、それは内容から浮き上がっていて主題を明らかにすることにはならない。表現の美しさを求める詩人の心には美しい言葉が次々と現れてきて、それをやたらと並べているうちに、やがて満艦飾のような文章が出来上がってしまう。ごくありふれた主題を取り扱う散文の目的は真理であり、そこで大切なのは例証の力強さ、説得力の厚みである。ふと思ひ浮かんだものを美しく表現することではない。」(…In prose, the professed object is to impart conviction, and nothing can be admitted by way of ornament or relief, that does not add new force or clearness to the original conception. …Every word should be a blow : every thought should instantly grapple with its fellow. There must be a weight, a precision, a conformity from association in the tropes and figures of animated prose to fit them to their place in the argument, and make them tell. …) (18)

これを書きながらハズリットは詩人コウルリジの書く散文を悪質低級な散文の典型であると言っている。ハズリットが詩を低く評価したのでは勿論ない。地上の現実から遊離してはならない散文と違って、「宇宙的規模で世界を闊歩する」(having the range of the universe, it [i.e. poetry] traverses the empyrean, etc…) (19) 詩人が、散文固有の性質や本来の目的をかえりみずに散文の世界に土足で踏み込んで書くような文章は、散文を本命とするハズリットには腹立たしかったのである。

#### IV. 人と言葉と文章と “gusto”

ハズリットは技巧的な文体を嫌った。そのような文体で書かれた文章では、「言葉が物事に従うのではなく、物事が言葉に従わされている。」(The words are not fitted to the things, but the things to the words.) (20) 「物が人間感情に結びつけられず、言葉もまた物事に結びつかない。」(Objects are not linked to feelings, words to things.) (21)

ハズリットのこのような考え方は、モンテーニュが『エッセー』第1巻26章に力説した彼の文体論そのままである。即ち、「事柄をしっかりと掴んでいれば言葉は自然に出てくる。」「物事は後ろに言葉を従えている。」「はっきりした思想を抱えている者は必ずそれを表現するであろう。」これをハズリットは、「必要な言葉は物事それ自体に備わっている。」(The word must come of itself or arise out of an immediate impression or lively intuition of the subject ; that is, the proper word must be suggested immediately by the thought.)<sup>(22)</sup>

では、物事をしっかりと掴んでいれば言葉は自ずと出てくるものなのだろうか？ いや、そうではない。ハズリットは、そこに散文書きの苦労があると言っている。「必要な言葉は心の熱と発酵の結果としてはじめて表に現れてくるものだ。泡が波立つ流れから生まれるように。明快な光り輝く文章を作るのは、これだ。」(Proper expressions rise to the surface from the heat and fermentation of the mind, like bubbles on an agitated stream. It is this which produces a clear and sparkling style.)<sup>(23)</sup>

その苦労が前にハズリットの言っていた、「私の言いたいことを人に伝えられそうな言葉が見つかるまで私は休まなかった」とも言い、また、「私の最初の草稿を見れば、決定稿ができ上がるまでには、どんなに多くの変化があったかわかるだろう。8ページ書くのに私は8年、年を取った」とも言ったのである。

美が人生の中に持つ意味を謳ったキーツの美の宣言となった一行、“A thing of beauty is a joy for ever.”も、そうなるまでには多くの時間を要した。キーツの原稿を見た友人の発したひと言が助けとなってようやく今の形になったのである。これをハズリットは、人の名前や地名と同じように、いくら思い出そうと努めても、本当に言いたい言葉が出てこないことがあるが、それが思い出されるのは偶然の働きによると言っている。<sup>(24)</sup> その偶然が、意識的努力の結果起こるのか、あるいは全く忘れていた時に起こるのかはともかく、いずれの場合も、適切な言葉を探し求める者の苦労を語っている。

あるいはまた、本当に物事は言葉で表現することができるのだろうか？ 表現できたと思っても、それは必ずしも真実と言えるものではなく、真実は別の所に沈黙したまま、誰かの手によって表現されるのを待っているのかもしれない。これをハズリットは次のように述べている。

「繰り返されると言葉は明確な意味を心に全く伝えなくなって、ただの無意味な音になってしまう。われわれの虚栄が、その言葉の中に何らかの興味と意味を持たせているにすぎない。私は自分の考えを他人に押しつけるよりも、それを自分で保持することの方に一層、満足を覚える。ある物事が私に与えた印象を読者に説明するため、言葉は不可欠ではあるが、説明することによってその物事はむしろ、私に与えた印象を強めるよりも弱め、曖昧にしてしまうのだ。《わが心こそ、われには王国なり》 (“My mind to me a kingdom is.”<sup>(25)</sup>) と言った昔の詩人に私は賛成するが、《他人に理解してもらうためなら王位も国も賭ける》 (“to set a throne or chair of state in the understanding of other men.”)<sup>(26)</sup> ほどの野心は私は持ち合わせてはいない。自分が一番大切にする思想は暗い影のような抽象の世界にこそ、最もよく生き続けるのだ。詩にも言うではないか：《心の最後の隠れ場所

に純粹なままに。》(The ideas we cherish most, exist best in a kind of shadowy abstraction. 'Pure in the last recesses of the mind.')(27)

それなら眞実は、そのままそっとしておくほかないのだろうか？ 前に、物事をしっかり掴めばそれを表す言葉は自然に出てくる、とモンテーニュとハズリットは言っていたではないか。心の奥底にしまっておいてこそ、眞実は安住するというのは本当なのか？ 詩人キーツが夜鶯にたとえた妖しい声は確かに彼に聞こえた声だったのか？ だが、それを聞かなかった者たちに詩人はどうやって説明すればよいのか？ この世のすべては言葉による表現を待っている筈だから、それを表現し切ることこそわれわれの仕事ではないのか？ とはいえ、この世には言葉をもって表現できないものもあるのではないのか？ これをキーツは次のように歌っている。

「事物はわれわれの意に従わず  
かえって心をそぞろにして思考から引き離す。  
それともこうだろうか —  
想像力が昂じてその分限を越え、  
しかも一面では制約されて、  
行方も見えぬ憐憫の闇に踏み迷うと、  
天地どちらの理法にも従いぬのか。  
幸福に黒い影を落とすものは埒外を  
見ようとする —  
それは夏空の下にあって私たちを悲しくさせ、  
ナイチンゲールの歌声を毒する。」  
[ジョン・H. レノルズへの手紙、76-85]

「自分が追いかけてやろうとした夜鶯の声は、  
果たして現実のものであったのか、  
それとも単なる幻であったのか？」

「あれは正夢であったか、眞昼の空耳であったか、あの調べはもう聞こえない — 夢か現か。」(28)

だが、「暗闇の中で光を求めてもがく神秘を明るみに導き出して、それを言葉という形を持つものに変えなければならない」(must be dragged out of their obscurity and brought struggling to the light)(前出) — これがハズリットの言う散文の、そして散文作家の正念場であった筈。そのように形ある言葉となったものをハズリットは、「自分が心血を注いで集めた眞理の閃光」(sparks of truth, which I

have been at so much pains to collect) (前出) と呼び、その光を見つけるために彼は、「私は自分の書くこと一つに全精魂を投入することしか考えなかった」と言ったのである。

ハズリットの言う散文作家の役割は、モンテーニュの「事柄が主となり、それが読者の心に充滿して、そこに書かれた用語など全く思い出せないような」(I-29) 文章を書くことであった。その文章は、セネカが言ったという、「真理に奉仕する言葉は単純で作為のないものでなければならない」(同)の教えを厳守するものなのだ。その時セネカは「真理に奉仕する言葉」と言った。「真理を表現する」とは言わなかった。「暗闇に待ち受ける神秘を言葉に変える」と言った時でもハズリットは「人知の及ぶ限り」(as far as it is in the wit of man to do so) と書いた。パークのことを彼は「真実への道を示した (showed the way to truth) と言って、「真実を示した」とは言わなかった。真実への忠誠 (fidelity to truth) は限りなく難しいことであるから、真理を表現する言葉もこの世に実在するとは思えない。真理に奉仕する、真理に近づく言葉 — これを書くのが散文作家の役割というべきであろう。その「真理に奉仕する言葉」をハズリットは、「心臓からほとぼしり出る命の血」(the lifeblood gushing from the heart) (前出) と言った。切れれば血が噴出する言葉のことである。散文作家の用いる言葉はその一つ一つが決定打でなければならない、とも彼は言っていた。血のない言葉が真実への道をさし示すことはできない。それは人間の熱い感情 (passion) と深くかかわり合っている。人間性の探究も、人間の感情と言葉の探究をおいてほかにはない。その人間性探究を目指した方法がモンテーニュの場合、自分を見つめ、自分を語ることであった。材料を外に探し求めなくても自分の中に人間共通の感情と言葉が備わっているからである。

「私は眼を内部に曲げる。私は自分の内部を見つめる。たえず自分を考察する。私自身のうちに自らを省みる。」(II-17)

「各人に自己をつぶさに見きわめるだけの能力がありさえすれば、自分こそその人にとってすこぶるよい教材なのだ。ここにあるのは(筆者注:『エッセー』のこと)私の学説ではなく、私の研究なのだ。他人のための教訓ではなく、自分のための教訓なのである。」(II-6)

「何かほかのことを研究しても、それはすぐに私の上に、いやもっと正しくいえば私のうちに、あてはめて見るためである。」(同)

「私はこの本(『エッセー』)を書くにあたって、自分のこと私のことよりほかには何も目指しはしませんでした。」(「読者に」)

「ここにあるのは私の幻想であって、これによって私は物事を知らせようと努めているのではなく、ただ私を知らせようとしているのだ。」(II-10)

人はみな全人類の形相を一身に集めているのだから、自分一人を研究することは全人類を研究することになると考えたモンテニユを代弁するかのよう、ハズリットは次のように書いている。

「人生を喜び、あるいは憂えるわれわれの感情が正しく表現されるなら、その言葉の中にわれわれは自分一人だけのものではない全人類の喜びと悲しみを見ることができる。なぜなら、われわれ一人一人が全人類の縮図であり、一人一人の人間は他のすべての人間の形相を自分の中に完全な形で備えているからである。ある事柄について一人が抱く感情をわれわれが知るなら、われわれは全人類がそれについて抱く感情を知ることができる。人間の存在と行動は限りない多様性の永遠の繰り返しである。したがって普遍的人間性についてのわれわれの感情は、限りなく多様な形相のもとに現われる人間の普遍的真実が、われわれの中に一つに凝縮されたものにほかならない。その感情こそ、人類の誕生以来、繰り返し繰り返し語り継がれてきたものである。」<sup>(29)</sup>

画家は自分に合わせて人を描くという。自分でも人の肖像画をかいたハズリットは次のように言う。

「画家が肖像画をかく時、そこに描き出すのは自分の個性以外の何ものでもない。対象への自己投入、感情への一体化が対象を表現しようとする者の目と手を、観察と行為のすべてを、あやつる。」<sup>(30)</sup>

そのようにして出来上がった作品は作者の自己投影にほかならない。

「われわれの行為のすべてはわれわれの内面的印象の度合いの強さを写し出している。行為は直感と習慣的感情の投影である。われわれの心の中に焼き付けられた映像は、それを投影した他の人間と事物に向かうわれわれのあらゆる行為の源泉である。」<sup>(31)</sup>

言葉・文章もまた同様である。

「人の文章は、人が対象をどのように理解したかを物語るのと同じように、その人の感性を表現する。」<sup>(32)</sup>

「感性こそ人間の真実である。それなくして吐かれた言葉が真実を伝える筈はない。人間の真実は論理や数字などとは無縁のところにある。」<sup>(33)</sup>

モンテニユは言った。

「心の高潔な人は決して自分の感性を偽ることをしない。心の底まで見てもらうことを望む。そこ



ではすべてが良い。少なくとも人間的である。」(Ⅱ-17)

モンテーニュが読書に求めたのは「著者の靈魂と天性の判断がそこに見られる文章」(Ⅱ-10)であって、「学問や知識を樹立する文章ではなく、それらを活用している文章」(同)であった。「人間は各人の中に人間性の完全な形相を備えている」(Ⅲ-2)と言ったモンテーニュは、自分自身がどういふ人間なのかを語る『エッセー』を、人類始まって以来、最も忠実な、そして最も完全に近い自画像にしようと決心した。自分を語ることは全人類を語ることになるだろう。その真実を言葉によってどこまで表現できるかを、彼はもはや疑うことをしなかった。「ただそこに忠実さをもってすれば足りる。」(Ⅲ-2)そこに描かれた自画像が、「いろいろに移り変わる出来事と、定めない、否、ときには相反する思想の記録」(同)であったとしても不思議ではない。なぜなら「世界は永遠の反復にすぎない。万物はそこで絶えず動いて私は私の対象を固定できない」(同)からである。「存在 (être) を描かず、移り変わり (passage) を描く」と言うモンテーニュの『エッセー』の「主要な、そして究極の目的は、ただ、正確に私のものであることなのだ。」(Ⅲ-5)

正確に自分のものだということは、繰り返して言えば、万人のものだということと同じことである。一人の人間が正直、誠実、確実を常に自分の信念として、自分の考えていることを書くならば、それは万人に通ずるに違いない。ハズリットは「正直こそ天性の雄弁である」(An honest man is an orator by nature.)<sup>(34)</sup>と言った。

対象に肉薄するわれわれの熱情 (passion) と、逆に対象がわれわれに訴える迫力こそ、ハズリットの愛稱する“gusto”である。それはもともとは彼が絵画彫刻について言った言葉であるが、それがどのように使われたのかを一瞥してみよう。

「“gusto”は対象をはっきり表現する力のことであり、情熱のことである。表現することが全く不可能だという事物はほとんどない。あらゆるものに、それ固有の、われわれに訴える力がある。それがわれわれに喜びを、ある時はまた苦しみを呼び起こす。対象の真実をわれわれの感性によって可能な限り明らかにする力、それが“gusto”である。ティツィアーノ (Tiziano Vecellio) の絵の色彩にはそれがある。彼の人物画を見よう。頭部は思索するだけではない。全身に感覚が備わっている。人物が生きているのだ。人物の絵がそこにあるのではなく、物を感じる人間がそこにいる。ルーベンス (Peter Paul Rubens) の描く肖像の肌は花のようであり、アルバーノ (Francesco Albano) のそれは肉そのものである。全身の機能が、その一つ一つの器官を通して生きている。血管には血がかよっている。その躍動感あふれる存在、それが“gusto”である。」<sup>(35)</sup>

「ヴァンダイク (Anthony Vandyke) の色彩は真に迫ってるが、“gusto”がない。彼の描く人物には、生きた人間が持つ精神的なものが欠けている。外観はいかにも本物らしいが、温かみがなく、動きがない。彼の絵は観客の目に入るというだけで、ティツィアーノの絵のように人の心に衝撃を残す

ことがない。ミケランジェロ (Michelangelo Buonarroti) にははちきれんばかりの“gusto”がある。彼が描くすべての部分に力がある。手足は意志の命令一下、いつでも行動に移る態勢にある。顔は他のすべての部分と全く同じように力と意志に溢れている。ティツィアーノの絵がくっきりと男性的だというのは、こういうことである。クロード (Lorrain Claude) の風景画はどうだろう。樹木の美しさは完璧に近い。しかし魔法にかかった森の木のように全く静止している。ティツィアーノの風景画では、石のように無生物の色彩で塗りこめられた空の下に、どんよりした空気が風に吹き乱されて、その風が木々の枝をふるわせている。ぶつかり合う音が絵から聞こえてくる。」<sup>(36)</sup>

「ギリシア彫刻の“gusto”は特殊なものである。そこでは人体の理想を作り出すことが唯一の目的であった。人物の動きや感情を像に彫り込むということはギリシアの彫刻家たちは考えなかった。理想の人間像が存在するだけで十分だと彼らは考えた。その像は霊的なものである。じっとして動かない像の迫力が美しい。その美しさが人間の喜怒哀楽を超えて、彫刻を神に近づけている。」<sup>(37)</sup>

ある事柄を正しく表現するにはこれしかないという決定的な一語、そしてその語が自ずから次の語を呼んで対象に肉薄する文章の力、それが文章の“gusto”である。それは書く者の心と同様、常に動いて留まることがない。その文体は静止した美しさよりも、躍動する生命、揺れ動く真実を求める。それは時として人を激しく傷つけるかもしれないが、可能な限り真実に接近してそれを明るみに引きずり出すためには不可欠な力である。

対象を表現することは自分自身を表現することでもあるから、表現の中に“gusto”を他の何ものよりも重んじたハズリットの文章道は、人間のあり方、生き方を極限まで追求することであった。そこには詩的な美しさや繊細さよりも力強さが要求される。文章道の模範としてハズリットはしばしばパークを例に挙げたが、詩的な美しさや繊細な文章で名をなしたシセロと、自分の文章道の範となったパークとの違いをハズリットは次のように述べている。

「この二人の文人の卓越性は正反対である。パークにはシセロの洗練された優美さはなかった。文章の均等性も欠けている。しかしパークにはシセロの何千倍という無尽蔵の豊かさ、独創性があり、その力と流れは自然でとどまることがない。」<sup>(38)</sup> (Burke has been compared to Cicero - I do not know for what reason. Their excellences are as different, and indeed as opposite, as they well can be. Burke had not the polished elegance ; the glossy neatness, the artful regularity, the exquisite modulation of Cicero : he had a thousand times more richness and originality of mind, more strength and pomp of diction.)

ハズリットが愛した18世紀イギリス国会の雄弁家たちは、ひとり残らず“gusto”に満ち溢れた者のことであった。その典型がパークであり、これをハズリットは自分の文章道の終生の友とした。

文章に自分を投影させる情熱と誠実さを“gusto”に集約させて、これを文章の掟とし、これをもって他人の文章評価の主要な基準としただけでなく、彼自身の文体としたハズリットの体質 identity は、もしかしたら、世の文人たちの中でもひととき特異なものであったのかもしれない。というのは、ハズリットほど文章に賭けた情熱の強さを、われわれは他の文人たちの中に見いだすことは難しいからである。文章の完成美とはハズリットにとって、自分の感性を正確に表現して、これ以上のものはないという域に達したもののことである。人間が創り出すものはすべて創造者自身の identity の表現であって、それは理論や学説ではなく感性にほかならないと言うハズリットは、その表現の道を、彼が愛好したギリシア、ローマ、あるいはその他の彫刻家・画家たちの例に従わず、なぜ文章に選んだのか？ なぜそれほどまでに文章に惹かれ、その道一つに執念を燃やしたのだろうか？ ハズリットは書いている。

「行為は時がたてば消えるし、忘れられてしまう。その結果の中に辛うじて跡をとどめるだけのことである。しかし言葉と思想、感情は時と共に凝結してくる。それとは逆に物事・肉体・行為はみな弱体化し、空気の中に小さな音響をのこして溶け込んでしまう。その人の善行も、よい人柄もまた、同様である。不滅のものとして後世に伝えられるのは人の知性だけである。それを表現する言葉こそ、永遠にのこる唯一のものなのだ。」(Actions pass away and are forgotten, or are only discernible in their effects. …Words, ideas, feelings, with the progress of time harden into substances : things, bodies, actions, moulder away, or melt into a sound, into the air ! …Not only a man’s actions are effaced and vanish with him; his virtues and generous qualities die with him also : his intellect only is immortal, and bequeathed unimpaired to posterity. Words are the only things that last for ever.)<sup>(39)</sup>

詩人キーツは唯美主義者として自分の identity を、“美しきものは永遠のよろこび”(A thing of beauty is a joy for ever.)の一行に込めた。散文家ハズリットの identity は、上の引用最後の一行、“言葉こそ、ただ一つの永遠”(Words are the only things that last for ever.)に凝縮されている。本稿の冒頭に述べたことを今一度繰り返したい。そのようなハズリットなればこそ、R. L. Stevenson は「ハズリットほどの文章を書ける者はいない」と言って激賞したし、またイギリス文学史上屈指のハズリット全集を出した P. P. Howe は、「彼はハズリットを生きたとまで人に言われたほど、ハズリットを愛したのである。

#### 〈注〉

1. “Character of Mr. Burke,” 1807, *The Eloquence of the British Senate, Hazlitt*, VII. 301.
2. *Characteristics*, 206, *Hazlitt*, IX. 198.
3. *ibid.* 207, IX. 199.
4. *ibid.* 388, IX. 223.
5. *ibid.* 389, IX. 223.
6. *The Round Table, Hazlitt*, IV. 5.

7. *ibid.* p. 4.
8. "On Reading Old Books," *Hazlitt*, XII. 220-221.
9. *Paradise Lost*, XI. 282-285.
10. *Hazlitt*, VIII. 107.
11. cf. "A Letter to William Hazlitt, Esq." *ibid.* IX, 13-59.
12. cf. *ibid.*
13. *ibid.* 30.
14. *ibid.*
15. Maurice Buxton Forman, ed. *The Letters of John Keats* (O. U. P. 1960), Letter, No. 123.
16. *ibid.* No. 98.
17. *ibid.*
18. *Hazlitt*, XII, 5-12.
19. *ibid.* IX. 50.
20. *ibid.* VII. 310.
21. *ibid.* VIII. 249.
22. *ibid.* VII. 62.
23. *ibid.* VII. 62-63.
24. *ibid.*
25. Edward Dyer, d. 1607, cf. *ibid.* VIII. 334 note.
26. cf. Francis Bacon, *Advancement of Learning*, Book I, chap. VIII.)
27. *ibid.* 7, "Pure in the last recesses, etc.", Editor's note : *Satires of Persius.*, II.
28. 上島建吉訳、「魔に魅入られた詩人キーツ : *Ode to a Nightingale* を読む」(*Aurora*, No. 3, 1999), pp. 111-112.
29. *Hazlitt*, VIII, 54.
30. *ibid.*
31. *ibid.* IV. 42.
32. *ibid.*
33. *ibid.*
34. "Parliamentary Eloquence", *Uncollected Essays, ibid.* XVII. 9.
35. "On Gusto", *The Round Table, ibid.* IV. 77.
36. *ibid.* p. 78.
37. *ibid.* p. 79.
38. "Character of Mr. Burke," *Political Essays, ibid.* VIII. 312.
39. "On Thought and Action," *ibid.* VIII. 106-7.